5章

【問題】（演習）

出典…佐々木健一『せりふの構造』／上智大学　文学部　00年

文章略解

「芝居がかった言葉」という言葉からもわかるように、演劇における表現形式は特殊なものだ。劇中の世界が進行すると同時にその世界が演劇として観客へと開かれているという二重性こそがその特殊性である。そこでは劇中の虚構の内世界的コミュニケーションと、観客に向けられた一方向かつ現実の芸術的コミュニケーションとが同時に成立しており、その芸術的コミュニケーションの現実性が観客の感動を生み出しているのである。

解答

問1　4　　問2　3

問3　4　　問4　1

問5　2　　問6　4

問7　3　　問8　1＝A　2＝B　3＝B　4＝A　5＝B

【問題】（演習）

出典…吉田兼好『徒然草』「第二百三十一段」　／　東洋大学　経済学部　96年・改題

現代語訳

園の別当入道さまは、（料理の家元である四条流の分家の園流の家柄で、）並ぶもののない料理の名人である。ある人のところで、（その日の御馳走に供するものとして客人に）見事な鯉を披露したところ、一座の人はすべて、別当入道の調理ぶりを見たいものだと思ったが、（そんな希望を本人を目の前にして）軽々しく口にするのもどんなものか（やはり不適当だろうか）とためらっていると、別当入道は気の利く人で、「（実は、料理上達の修行のために）近ごろ、百日間、毎日鯉を切る（ことを日課としている）のでございますが、今日それを（欠かす）わけにはまいりません。どうかぜひとも、（その鯉を）頂戴いたしましょう」と（おっしゃっ）てお切りになった（のだが、それは）本当に（その場の雰囲気に）ふさわしく、興あることだと、人々は思ったと（いう話があるのだが）、ある人が、（それを）北山太政入道さまにお話し申し上げなさったところ、（北山太政入道さまは）「そのような行為は、私には、実に煩わしく思われるのだがねえ。『適当な料理人がいなければ、（私にお任せ）ください。切りましょう』と言ったならば、きっともっとよいだろうに。どうしてまた、百日の鯉を切る（などと言う必要がある）だろうか」とおっしゃった、（その意見を）おもしろく感じたと、ある人がおっしゃったというが、（私も）まったく同感である。

どんなことでも、ことさら作為的に趣向を凝らしておもしろいのよりも、おもしろくはないが素直でわざとらしくないほうが、優っていることなのだ。客人のもてなしなども、（その）場合（にあわせて）おもしろいようにとりはからっているのも、本当によいのだけれども、ただその（ようにわざわざ客のために用意したという）こととしてではなくて（御馳走を）出しているのが、たいへんよい。だれかに何かを与えた（場合）も、（わざわざそのような）機会も（つくら）なくて、（ただ）「これを差し上げよう」といった（渡し方をするのが）、本当の志（というもの）である。（そのものを）惜しがるふりをして、（相手から）欲しがられようと思ったり、勝負に負けたためのもてなしにかこつけたりしたのは、面倒でいやなものだ。

解答

問1　5

問2　B＝2　C＝3　D＝1　F＝1　G＝3　H＝2

問3　(a)＝4　(b)＝1　(c)＝1　(d)＝5　(e)＝8

問4　(a)＝2　(b)＝2　(c)＝3　(d)＝4　(e)＝4

問5　3

問6　4

問7　(1)＝この程百日　(2)＝園の別当入　(3)＝切りぬべき　(4)＝かやうの事　(5)＝園の別当入

問8　ア＝3　イ＝11　ウ＝4

問9　1

【問題】（自習）

出典…小林秀雄『白鳥・宣長・言葉』〈言葉の力〉／明治大学　経営学部　01年

文章略解

初めに言葉があった。人間は、知る前にしゃべるという方法を死ぬまで繰り返さざるを得ない。私達は言葉の観念上の意味を重んじるが、言葉の本来の姿は行為の様式としての言葉にある。観念的な言葉はそこから派生したものだ。我々は言葉に意味が含まれると分析的な誤解を犯すが、詩人にとっては言葉の意味と詩作とは不可分である。古代の人々にとって、言葉とは現実の対象や実際の行為に有効な一種の力であった。詩人も同様である。

解答

問1　a＝呑気　b＝諺

問2　c＝よう　e＝さき

問3　ア＝4　イ＝3　ウ＝2　エ＝2　オ＝1

問4　1＝挨拶〔24行目〕　2＝言霊〔50行目〕

問5　A＝2　B＝4

問6　3　問7　3

解説

問3

ア　空欄**ア**を含む条件節の「方法」が、指示語「この」で受けられて、「この方法を、死ぬまで繰返へさざるを得ない。」と文末が締めくくられている。「死ぬまで」という表現に着目すると、「この方法」とは、言葉を子供が『身につける』方法かな？と見えてくる。一旦身につけると死ぬまで、という形になる。

実はこの設問は、「……『初めに言葉があつた』のである。」という冒頭の一文の「初めに」に着目するところから始まる。続いて、第三文以下の「意味も知らぬ言葉をしやべるのは、子供だけだ、と大人はノンキに考へてゐる。だが、……」に着目する。「意味も知らぬ言葉をしやべる」すなわち「知る前にしやべるといふこと」から子供は「初めに」言葉を身につけ、大人になっても「死ぬまで」この方法を繰り返している、という趣旨なのである。

イ　「殆ど無意味な言葉を私達が使ふ意味は何処にあるかを考へれば」という条件節と、次文の「結局、意味といふ言葉の取りやうに、考へ方に帰するのである。」とから考える。「意味」という言葉の定義が明確ではない、と言っているのだから、答は？

ウ　「これを使ふ場合の、人間の態度なり、動作なり、表情などの上から考へれば、」の「これ」とは、「お早う」という挨拶のことである。これは「人間同士の」何を表すのか？　という点から考える。

エ　「生活や行動のうちに［エ］し、」は、「身振りや、表情のなかに深くはひり込んで、」に結びつく。とすると、空欄**エ**は、「深くはひり込んで」と結びつくものである。

オ　「詩人、或ひは一般に言葉を扱ふ芸術家に対する、世人の大きな誤解」。その誤解の内容が、空欄**オ**までの連体修飾部で説明されている。したがって、空欄**オ**には、「誤解」と結びつく語が入る。

また、この空欄**オ**は指示語「さういふ」で受けられて、次文の「さういふ考へかたは、詩人の考へ方から最も遠いのである。」に続く点も考慮する。

問4

1　主語である「『お早う』は」から、すぐに推測がつくだろう。

この設問は、第3段落前半の「……これは勿論、我々の『今日は』に当る挨拶の言葉で、言葉の上だけでその意味を知ることはできない。だが、……この場合、言葉の意味とはすなはち、挨拶といふ行動の意味だ。」から考える。『お早う』と『今日は』は結びつく。共に『挨拶』の言葉だ。空欄**1**直前の「言葉といふよりもむしろ」と、「言葉の上だけでその意味を知るこ

とはできない。だが、」とが対応する。

2　まず、第6段落冒頭の「万葉の詩人は日本（やまと）を、『言霊（ことだま）の幸はふ国』と歌つたが、わが国に限らず、どこの国の古代人も、言葉には、不思議な力が宿つてゐることを信じてゐた。」に着目する。つまり、『言霊』イコール「言葉に宿る『不思議な力』」ということを前提とする。

ところで、空欄2直前の「これを」の「これ」という指示語は、「驚くほどの効果を現す言葉といふ道具の力」という箇所を受ける。これすなわち「言葉に宿る『不思議な力』」のことだから、これを何と呼ぶかは、先の前提から考える。

問5

A　傍線部Aの「社会生活」の説明として、選択肢3の「人間関係」だけでは、不十分である。「人間関係」は「社会生活」を構成する要素の一つにすぎない。したがって、限定のしすぎである。選択肢4の「人間同士を強く結びつける」にも、同じことが言える。

また、「靱帯」とはアキレス腱みたいなもので、それなしには動かないものだから、選択肢1の「特に大切にしなければならない」どころではない。不可欠のもの、それなしには「不可能になる」ものである。

B　傍線部B直前の「ところが」は、「我々」と「詩人」を対比している。とすると、「詩人」が「なんの興味も持たぬ」あるいは「極力反抗する」ところの「さういふ考へ方」とは、「我々に必至のやり方」であるところの「言葉といふ箱の中に意味が入つてゐるやうに言葉には意味が含まれてゐる、と分析的に考へる」ことである。「詩人」は「さういふ考へ方」に「なんの興味も持たぬ」あるいは「極力反抗する」――すなわち「さういふ考へ方」を「嫌う」のである。

問6　傍線部dの次の行に「詩は思ひつきで書くのではない、言葉で書くのだ」とある。「思ひつき」と「言葉」とは対立する。

続いて、「まづ詩的な観念があり、それを言葉にしたものが詩である」や「自分だつて、詩人のやうな豊かな感情なり、複雑な観念なりは持つてゐるが、ただそれを言葉にすることが下手なだけだ」に着目する。ここには、「観念・感情」対「言葉」の二項対立がある。言葉との対立関係において、「観念・感情」は「思ひつき」と結びつく。

更に「詩の形式から離れた詩の内容といふものはない」では、「詩の形式」と「詩の内容」とが対置されている。「詩の内容」が「観念・感情」すなわち「思ひつき」と結びつくとすると、「詩の形式」はこれに対立する。

問7

1　第1段落の「意味も知らぬ言葉をしやべるのは、子供だけだ、と大人はノンキに考へてゐる。だが、……」という趣旨に反する。

2　「低級な言葉であると考えている」というより、第2段落末に述べられているように、「もはや言葉として認めたがらない」のである。

3　筆者は、第2、第3段落で「抽象的な或ひは観念的な言葉」と「行動の一様式としての言葉」との区別を批判した上で、第4段落で「一つの単語の場合でもその形と意味とは離すことができない。」と述べている。

4　**問5**のBで見た通り、こう考えるのは「一般人」の方である。「詩人」の方は、「さういふ考へ方」に「なんの興味も持たぬ」あるいは「極力反抗する」のだ。

5　**問3**のアで見た通り、「大人」になっても「死ぬまで」この方法を繰り返す。

6　**問5**のBや**問6**で見た通り、「詩人」は「思想だとか観念だとかの翻訳としての言葉」という考え方の対極にある。

【問題】（自習）

出典…『水無瀬恋十五首歌合』／早稲田大学　人間科学部

現代語訳

静かな部屋の中、粗末な柴の戸（の庵）に月日を過ごすばかりで、何の分別もなく、来ては去る季節もわからぬうちに、今年は（閏六月があって）夏が（ひと月）加わったせいでしょうか、（秋になると）風の音も格別身にしみる深さもまさって感じられる気持ちがして、生い茂った草々（の陰）で悲しみを誘うように鳴く虫たちの声もすでに鳴き枯らして聞こえるので、いっそう老い（の身）の涙を誘われて（命のはかなさを葉の上の）露と競い合いそうな（気持ちな）のだが、さまざまな物思いを尽くさせる木の間の月、（その）すきまだらけの板屋根から漏れてくる光が、少しばかり物思いを忘れる（せめてもの）慰みである。「（情趣を解する人だけが秋の月を見るというのなら、無風流な私は）何をつらい身の（思い出にしようか）」とひとりつぶやきますのも、（それを）耳にとめる隣人でさえいない私の住まいであるのに、思いがけない人が、この本を、「これを御覧ください。なみなみの代々の歌集などは（だれもが）いつも見慣れていることです。これはたいそう珍しいもので、ぜひとも歌を詠む人が持つにふさわしいものです」と教えてくれますので、実直な猿丸大夫（のような私）が、花の（ようにぱっと明るい）気持ちを感じながら、わくわくしながら拝読せずにはいられずにおりますと、なるほどいかにも和歌の道で迷う気持ちの指針となってくれそう（な本）で、老いに縮こまった気持ちものびのびとする気持ちがいたしますので、「あぁ風流のわかる人に見せたいものだ」と思い続けていたところ、（私との）縁もさほど遠いはずのない若者のことが、こうした風流心も少しはあるかもしれないと思い出されて、ただ一心に、（年老いて）霞む目を（涙を）しぼりしぼり見開いて、鳥の足跡（のように下手な字）のつたなさをも構うこともなく、元徳二年の初秋（陰暦七月）の中旬も過ぎるころに、書き写してしまいましたが、どう考えても若い人には笑われてしまいそうで、畏れ多うございます。一夜の間に吹く風（に）も（吹き散らされかねないと）気がかりな露の（ようにはかない我が）身であるので、（この本が）もし千年の後まで残りますならば、きっと（私のことを）お思い出しくださってお念仏を唱えてお弔（とむら）いくださいと思い続けるにつけても、すぐにこぼれ出る老いの涙のために、いっそう筆の置きどころもわからなくなりました。

流れ添ふ……（書く筆に）流れ添う涙は（悲しみに）いっそう流れ出ることだ。（私の）筆跡を見てくれる人も、菩提を弔ってくれる人もいないだろうかと思うと

解答

問1　ハ　　問2　イ・ロ

問3　珍しいもの（滅多にないもの・滅多になく素晴らしいもの・貴重なもの）〔いずれも解答例〕

問4　1＝ニ　2＝ハ　3＝ロ　4＝ハ

問5　D＝ロ　F＝ロ　H＝ハ

問6　風流を解する心（和歌を解する心）〔いずれも解答例〕

問7　はべれ　　問8　ニ・ホ　　問9　ニ

解説

問1　「思ひかけぬ人」（5行目）が筆者に対して述べた言葉に「いかにも歌なむ詠む人の持つべきものなり」（6行目）とあることがヒントとなる。この発言は、筆者が歌人であるからこそ出てくる言葉である。また、筆者自身が「まことに和歌の浦路に迷ふ心のしるべとなりぬべく」（7行目）と述べていることからも、この人物が和歌に関係深い人であることが推測される。したがって、正解はハ「世を捨てた歌人」となる。

問2　まず、傍線部の後半部に注目しよう。「聞きとがむる隣だになき身のすまひなるに」とは、筆者の「何を憂き身の」という呟きを耳に留める隣人さえいない住まいであることを意味している。つまり、筆者は孤独なのだということだが、この点を正しく押さえているのは、ロしかない。したがって、ロが正解として選べるであろう。これは、傍線部が訳せた段階で選べるものである。是非とも選択しておきたい。

次にもう一つの選択肢だが、これは新古今歌の理解から攻めていこう。まず、この新古今歌だが、これは「情趣を解する人だけが秋の月を見るというのなら、無風流な私は何を辛い我が身の思い出にしようか」という意味である。つまり、「何を憂き身の」と呟いた筆者はこの新古今歌の詠み手と同じく自らを「無風流な人間」＝「心なき身」として規定しているのである。しかし、このようにして和歌の一節を想起して口ずさむことじたい、風流な行為にほかならない。それゆえ、もう一つの正解はイとなる。

この新古今歌で言われていることは、「無風流な私も月を憂き世の思い出にしたい」ということなので、月影のみが慰めであるという直前の心情と矛盾すると捉えるハは間違いである。ニは後半の捉え方がおかしい。「いかなる外聞からも超然とした境地に到達した」のではない。また、ホ「今生の形見」とは書かれていない。

問3　「ありがたし」は「あり難し」であり、文字通りの意味は「あることが困難だ」である。そこから、「めったにない・珍しい」の意になり、そこから転じて「すばらしい・すぐれている」の意が生じた。ここは「常に目慣るる」ものである「なべての代々の集など」との対比で「この草子」が「ありがたきもの」と捉えられている。それゆえ、「珍しい」という意味でこの場合の「ありがたし」をおさえておくべきであろう。したがって「珍しいもの」などとして解答とする。

問4　基本的な文法問題。

傍線部に用いられている補助動詞は「たまへ」である。この「たまふ」には、四段活用で用いられる《尊敬語》の場合と、下二段活用で用いられる《謙譲語》の場合がある。これは受験古文の頻出事項なので、訳し方・見分け方などにも十分に気をつけておさえておこう。さて、この場合だが、次の「らるれ」は（次の選択肢を見れば明らかなように）《自発・可能・受身・尊敬》の助動詞「らる」である。この「らる」は未然形接続の助動詞なので、問題の「たまへ」も《未然形》となる。つまり、未然形が「エ」で終わっているので、下二段活用である。

「らるれ」に関して求められているのは、文法的意味の識別である。この場合は「私がこの草子を見る」という文脈なので、《受身》と《尊敬》の可能性はすぐに消すことが出来る。残るのは《可能》か《自発》だが、一般に可能は《打消》を伴って「～できない」となることが多い。また、《自発》は「思ふ」「忘る」などの「心の働きに関する動詞」以外にも「見る」「聞く」などの知覚動詞にもつくので、この場合は《自発》で理解するのが素直である。「（わくわくしながら）拝読しないではいられない」の意味になる。

接続助詞「ば」は、未然形に接続する《順接仮定条件》の用法と已然形に接続する《順接確定条件》の用法がある。ここは「らるれ」という已然形に接続しているので、確定条件順接の用法となる。

以上から、正解は1＝ニ、2＝ハ、3＝ロ、4＝ハとなる。

問5　D　「和歌の浦」は和歌山県の歌枕として有名だが、ここは「和歌」が地名ではなく文字通り「和歌・歌」の意味を表し、「浦路」の「路」と響きあって「和歌の道」の意味で用いられている。それゆえ、「和歌の浦路」を実際の地名として解釈しているイニホは不適。残るのはロとハだが、これは傍線部に「和歌の浦路に迷ふ」とあることをおさえれば容易。ここを正しく解釈しているのは、「過程で生ずる」とするロである。ハ「道へ入門する」はこの点で正しくない。

F　「鳥の跡」とは、文字・筆跡のこと。特に下手な筆跡を言うことが多い。したがって、ロが正解。

H　古文における「露」は、涙やはかない命の比喩として用いられることが多い。この場合も、前後に筆者が年老いていることを示す叙述が散見されるので、はかない命の意味で理解する。この点から選択肢はロとハに絞られる。次は、末尾の「なれば」に注目する。これは「已然形＋ば」なので、《順接確定条件》となり、「～なので」の意になる。ここを正しく解釈しているのは、ハ

である。ロ「～とすれば」では仮定条件になってしまい不適。

問6　「かかる」の指示内容を押さえる。ここで筆者は「あはれ心ある人に見せまほしく」思っていたので、この草子を書写したのである。この流れを踏まえれば、「かかる心」とは「あはれ心」のことを指していると判断できる。

問7　係り結びの問題。「書き写しはべりぬるこそ」とあるので、結びは已然形となる。したがって、「はべれ」が正解。こういう基本的な問題では確実に得点していこう。

問8　諸君の実力差がはっきりとでそうな設問。古文に慣れている人にはなんということのない設問だが、不慣れな人は手も足も出ないという感じではないだろうか。

まず一つ目の意味は、前からの自然な繋がりから出てくる。「水茎のあと」というのだから、この「あと」は「跡」の意味であり、具体的には**問5**のF「鳥の跡」と同じく「水茎の跡」も「筆跡」を意味している。この点からニを選ぶ。

残る一つは、後ろへの繋がりを考える。「あととふ人もあらじ」というのだが、これは和歌の直前の「千歳のあと留まりはべらば、必ず思し召し出でて御念仏申してとぶらはせたまへ」を参考にすると、筆者の死後にその「後を弔うこと」すなわち菩提を弔うことだとわかる。

したがって、この点からホを選ぶ。

問9　各作品の成立した時代は、イ『懐風藻』は奈良時代、ロ『去来抄』は江戸時代、ハ『高野聖』は明治時代、ニ『徒然草』は鎌倉時代後期、ホ『方丈記』は鎌倉時代前期である。したがってニが正解。